第23回グラフィックアート『ひとつぼ展』

公開二次審查会 REPORT



『日本に生きる一人の女の自由』をテーマにした エネルギッシュでインパクトのある作品が見事受賞 グランプリ受賞 ASADA

日時 2004年9月2日(木) 18:10~20:30

会場 リクルートG 7 ビル B 1 セミナールーム

審査員 50音順・敬称略 青葉益輝 (アートディレクター) ひびのこづえ (コスチューム・アーティスト) ヒロ杉山 (イラストレーター / アートディレクター) 米村浩 (アートディレクター) 大迫修三 (クリエイションギャラリーG8)

出島 ASADA 春日干尋 喜久田友紀 清水愛子 高山真理 田頭慎太郎 藤木倫史郎 三輪大介 ワクイアキラ

2004年8月23日(月)~9月9日(木)









Guardian

Garden

今回で23回目となる『ひとつぼ展』。去る9月2日、グラフィックアート界の第一線で活躍されているプロの方々5人を審査員に招き、10人の出品者の中からグランプリを選ぶ公開二次審査会が行われた。グランプリ受賞者には、1年後にこの場所で個展を開催する権利が与えられる。多数の一般見学者が見守る審査会場は熱気と緊張感に包まれ、独特の雰囲気を醸している。そして、個展開催の権利を勝ち取るべく、出品者 -人ひとりが自身の作品についての説明を行った。

第23回『ひとつぼ展』のプレゼンテーションが始まった。

清水 「鳥の連続写真を一つの画面に表した作品は、時間の重なりによってできるカタチがテーマ。ごくごく 日常的に起きている風景を、写真やビデオによって繋げることで新しいカタチが生まれる。見たことが あるようで、見たことのないものを表現したかった。」





ASADA

「自分が自由であることの象徴をモチーフに選んだ。あえて不自由なものを提示して、自由を感じても らおうと思った。陶器で作った『ヘルメット』と『パンツ』、それを身に付けた自分の写真の掛軸という 作品で、自由に、強く、日本で生きる一人の女の愛を自分なりに表現した。」



がある。もっと自由で、もっと解放的な世界を自分の絵で創りたい。」

1913 「いつも、モヤモヤした気分をどうにかしたい気持ちで描いている。 今回出品した一坪大の一点の絵はフィクションがほとんどだが、そのほうが私にとってはリアリティ





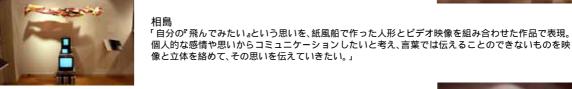
「普段の生活の中で気になったものを変化させて組み合わせているうちに、風景がカタチを創ってい

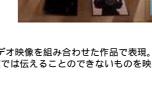
「一般的なポスターとは違うポスターがあってもいいのではないか

るという新しい方向性が生まれた。それを人形としてカラー粘土で作り上げ、数多く見せることで、様々 な共感を呼んでいけたらと思う。」



半立体の『穴』とか『しわ』が創りだす新たな魅力。それは、光の当たり具合、影の落ち方などの要素によ る無限の変化を生んでいる。」





「自由なテ・

- マでアイデアスケッチした、いわば落書きのおもしろさをフィギュアというカタチで表現 した。落書き感を追求すればするほど、思いもよらないフィギュアが生まれる。そこを楽しんでいただ けると嬉しい。」





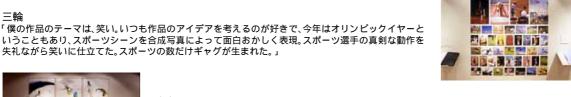
春日

「9人の女性のポートレートを描いた。目や鼻、口といったモチーフのその奥にあるものを描きたかった。 結局、私は人が好きなんだと思う。この作品を通して、それが解っただけでも描いてきた意味があった。」



三輪

いうこともあり、スポーツシーンを合成写真によって面白おかしく表現。スポーツ選手の真剣な動作を 失礼ながら笑いに仕立てた。スポーツの数だけギャグが生まれた。」





喜久田

「とても悲しいことがあったときに描いた絵。そんなときでも絵を描いていると、目の前にあるモチーフに救われる。そして、空想の世界に引き込まれてしまう。顔のない少女のメルヘンの世界を描くこと で、今の自分の世界観を表現した。」

出品者 10人のプレゼンテーションが終わり、審査員の方々による意見交換が行われた。

「もっと見せ方を考えないと、ポートフォリオ以上のふくらみは出ない」

をする、フレビノックコン間に付っており下間に対している。 杉山さんが一次審査のポートフォリオを見て、今日の作品を楽しみに来た けど、一枚絵の時に受けた衝撃がビデオにしたときには薄れた」と、やや残 念そうに言う。ひびのさんは「もっと見せ方を考えないと、ポートフォリオ 以上のふくらみは出ないと思う」と、見せ方の工夫に言及。青葉さんからば、時間の経過というテーマを鳥以外のモチーフでも作品にしたほうがいいので は」と、アドバイスも添えられた。 次に、ASADAさんの作品に対して。

まずは、プレゼンテーション順に清水さんの作品に対して。

ひびのさんが コスチュームアートと言えば、そうとも言える(笑),力強

さがとても伝わった」と、ご自身のジャンルを引き合いに出すと、米村さんが 前回以上に今回の作品はパージョンアップしていた。完成度の高さにち ょっと驚いた」と、感嘆の弁を発する。杉山さんも「焼き物という技術的に難 しいものを、短期間でここまでやり遂げたのはさすが」と、感心の様子だった。 注: ASADAさんは、第22回『ひとつぼ展』から2回連続で出品。 高山さんの作品に対して

大迫さんがなぜ、今回の作品は1点だったのか? 大きい絵を1点出品する

ないということ。しかし、実はコントロールされていないようにコントロ-ルしているのかもしれない」と、そのつかみ所のなさに触れる。 藤木さんの作品に対して。

自身、アーティストとしてキャラクターづくりも手掛ける杉山さんが「キャラクターを作りたいのか、新しいアートを作りたいのか、はっきりしなかった。顔のないものだけで構成すると面白かったかも」と、アウトプットの方 向性をアドバイスする。ひびのさんは「将来、何を目指してるんだろうとい うことが気になった。見ていて疲れるディスプレイだった(笑)」と、作品の 迷いを指摘。大迫さんも「人形の顔に気を使っていない。もっと、本人のパー

度を求めた。

ソナリティが顔に出ると良かったのでは」と、作品の一貫性のなさを指摘する。 田頭さんの作品に対して。 広告業界でアートディレクターをされている米村さんが「半立体ポスターというジャンルはやり尽くされている。手法はメッセージにはならない。もっとステージをずらすことも考えて」と、手厳しいアドバイスをすると、大迫さんが「現物より写真で見るほうがシャープな印象を受けた」と、最終的 な表現の仕方を指摘する。青葉さんばいろいろ頭の中では考えているのだ

ろうが、表現力がそれについて行ってないと思う」と、アウトプットの完成

相島さんの作品に対して。

コスチュームアーティストのひびのさんば、紙風船という素材はわたしも 使ってみたいと思った。ビデオあり、立体ありで、いろんな方向から模索し たことは評価するが、やりたいことが見えてこない」と、作品のメッセージ 性に触れると、杉山さんが今回の展示からは、飛びたいというテーマが伝わってこなかった」と、テーマと作品の乖離を口にすると、米村さんも「上 の立体、下の映像がバラバラになってしまった」と、展示方法の問題点も指 ワクイさんの作品に対して。 「イラストレーションともフィギュアともとれる作品だが、どちらを目指 しているのか?」と、ひびのさんが言えば、大迫さんが 脱力させたくて落

書きなのに、フィギュアのカタチが決まりすぎている」と、言及。杉山さん ば、わざわざ立体にする意味がないように思う」と、落書きの良さをもっと 出したほうがいいと提案した。 春日さんの作品に対して。

開口一番、ひびのさんが「私の知り合いに似ている絵がある(笑)」と、周囲を笑わせると、杉山さんが「僕は、この色がついた絵がすごく好きです」と、褒めたあとで、「ただ、楽しんで描いている感じが足りない気がする。ポー

トフォリオの中のコラージュはもっと自由に作っていたと思う」と、作品 づくりの姿勢にも触れていた。 三輪さんの作品に対して。 「スポーツ写真の素材集を使って肩の力を抜いた存在がおもしろかった」と、

米村さんが言えば、杉山さんば、スライドで一枚一枚を見せると笑えるかも」

と、笑わせ方を追求する場面も。最後に青葉さんが「何点見せるか、という 部分も大切になってくる」と、アドバイスを述べた。 喜久田さんの作品に対して。 大迫さんが「絵のストーリーはいつできるのか、ということが気になった」

と、絵の不思議さの印象に触れると、米村さんが、悲しいときに絵を描くと

いうテーマが新鮮だった」と、ショックを受けた様子。杉山さんが「自分のイメージをしっかり表現しているところが良い」と、コンセプトの具現化 を褒めた。 10人全員に対する意見交換を終えたところで、進行役の大迫さんが投票 用紙を取り出し、ここで審査へと移る。

いよいよ、審査はクライマックスへ。それぞれの審査員がまず3人を選び、その票数の合計でグランプリを決定することになった。 結果は、 青葉 / 清水 高山 春日 杉山 / 清水 ASADA 萠

迷いのないエネルギーでASADAさんがグランプリ受賞

米村 / ASADA 春日 喜久田 大迫/ 清水 ASADA 喜久田 これを集計すると 清水 / 4票 ASADA / 4票 春日 / 2票 喜久田 / 2票 高山 / 1票 藤木 / 1票 相島 / 1票

清水 ASADA 藤木 ひびの/清水 ASADA 相島

この時点でグランプリの行方は、ともに4票を獲得した清水さんとASADA さんに絞られた。では、グランプリにふさわしい作品はどちらか。ここからが、審査は難航。全員、難しいとため息がもれる中、「時の重なりというテー マで作られた一枚の絵を見たときの衝撃が忘れられない」と清水さんを推

い」と、決着がつかない。ある審査員からばいっそ、2人をグランプリにしては?」との意見も出るほどの接戦になった。そこで、「無記名で決選投票をしましょう」と大迫さんが提案。各審査員に投票用紙が配られ、会場に す、ひびのさん。「清水さんの作品は見終わると後でスーと引いていくが、 ASADAさんの作品はいつまでもショックが持続する感じがする」と は張り詰めた空気が流れた。グランプリ候補の一人、清水さんはうつむい ている。もう一人のASADAさんも緊張した面持ち。5人の審査員が悩んだ ASADAさんを評価する、米村さん。「一年後の個展を考えると、清水さんの ほうが可能性があると思う」と清水さん派の、青葉さん。「この日に向けて全員がんばって作品を仕上げてきた中では、ASADAさんの完成度が一番」 末に投票した結果は、やはり大接戦の3対2。迷いのないエネルギーが審 査員に伝わったASADAさんがグランプリに輝いた。

各審査員の方々からは異口同音に「もっと思いきりのいい作品があっても良かった」もっと見せ方の工夫がほしかった」などの感想が述べられ、

「この10人に選ばれたことが一番うれしかった」 グランプリを受賞した ASADAさんにパーティの最中に感想を聞くと、「今 回、10人という枠に入り、『ひとつぼ展』に出品できたことが一番うれしかっ た」という、自然体の答えが返ってきた。「この作品をがんばって作ったこ とが自信になった。私にはパワーしかありません。このパワーを評価してもらえたのが、うれしかった。一年後の個展もがんばりたいと思います」と、大好きだという缶ビールも口を付けただけで、ほとんど飲めない状態。最 後までASADAさんとグランプリを競った清水さんばくやしい結果になったけど、自分の力がない部分もわかっている。ASADAさんのグランプリに

は納得」とサバサバした表情で答えてくれた。インタビューの最中に、審査

員の米村さんが通りかかって「本当に差がないからガンバッテ!」と声を

かけられていたのが印象的だった。高山さんは「自信はあったのに残念。で

も、1票入ってうれしかった。この先も、モチベーションをもってやり続けたい」と、次への意欲が湧いてきた様子。藤木さんは「今回の自分の作品に は納得している。審査員の方々のいろんな意見を聞けて勉強になった」と、

自分に言い聞かせているようだった。田頭さんは「グランプリは、ASADA

さんか清水さんか春日さんだと思っていた。将来は広告業界に進みたいと

思っているので、この作品を出品できて満足」と、すっきりした様子。相島

さんば ひびのさんに 1票入れてもらって、自分の可能性を広げられるよ うな気がする。こういう場へ出品できたことは、いい勉強になった」と明 るく答えてくれた

ワクイさんば「1票も入らなかったのは残念。もっと自由に作れば良かったかも」と、反省しきりだった。春日さんば「2票入ってうれしいけど、だか

とASADAさん派についた、杉山さん。2対2となり、注目された大迫さん

の発言は「どちらの良さも捨てがたい。どちらもグランプリにしたいくら

らといって自分のスタイルは変わらないと思う。自分にとって必要な表 現と、やりたいことがわかった」と、まだまだ創作意欲にあふれていた。三 輪さんは「自分のやりたいことは、やりきった。そういう意味では作品に ついては満足している。今後はテーマを深く掘り下げる表現にも挑戦し たい」と、次への課題も口にした。喜久田さんは「ひとつのことをやり続け ることの重要さ、心底はじけることの大切さがわかった。もっともっと悩 みたい。2票入ってうれしかったけど」と複雑な心境を語ってくれた。 最後に、グランプリの ASADAさんに、もう一度聞いた。一番最初にこの結果を伝えたい人は? との質問には、「あっ、忘れてた! 焼き物製作のアド バイスをしてくれた二人の陶芸家の友人です」と言って屈託なく笑った

そこには、『ひとつぼ展』が終わった安堵とも、『一年後の個展』への助走と もとれる、日本に生きる一人の女の笑顔があった。 (文中一部敬称略 取材・文/田尻英二)